

チャプレン・オン・ザ・ピート  
教誨師、泥炭の上。

A Chaplain on the Peat 0306

第三部

第六話 月下の邂逅

.....

第六話 月下の邂逅

街灯は点っているのに、足元も手元も、暗く感じた。

まだ終電には時間があつたはずだが、いつもの金曜日と比べると、人通りは少なかつた。

それには、夕刻来報道され続けている臨海部でのテロ事件の影響も、あつたかもしれない。

犯人は不明で逃走中と言われれば、さすがにいつもと同じようには飲み歩けない。水曜の都知事暗殺未遂に続き、今度は江東区でテロ発生と立て続けに事件が起これば、ふつうの神経の持ち主は早めに帰宅する。

ふっと、一つ諦めたように息をつき、少女は携帯電話を取り出した。少女はそれらの事件の、当事者の一人だった。

「……森田、今どこ？」

「時田のねぐらにヤツを降ろしたところだ。地名的には、中目黒になるか。」

「迎えに来て欲しいのだけれど。」

「まだ麻布か？」

「少し歩いたから、そうね、ヒルズ辺りで拾ってくれる？」

「……分かった。」

人通りの極端に減った深夜の六本木ヒルズ付近を歩きつつ、相馬ひなは一人、学校を下校してからついさつきまでの出来事を振り返っていた。立ち止まることは、できなかった。歩きながら、考え続けていた。

カラースの跳躍力は昨日の段階で報告に上がっていたのに、なぜ初手からそれを使ってくるかと予測できなかつたのか。

なぜこの二日という短い期間で、シルバーの抑止力をあそこまで軽減されてしまったのか。どうして教誨師は、アサシンと後見人を守れなかつたのか。

背中には大きめのギターかベースを入れるようなケースを背負い、右手にはやはりバンド少女たちがよく持ち歩いているようなエフェクター類を納めるボックス型のケースを提げていた。裾からレースが覗く黒い三段フリルのミニスカートにごつい印象のブーツ、黒っぽいゴスペンク風のジャケットという出で立ちで、少女はゆっくりと歩いていた。もちろん背中や右手のケースの中には、鬼斬りやMP5K、それに最小限の弾薬類が納められている。単身行動時携行用の装備に鬼斬りが加わった、そんなところだったが、傍目には十分、こんな夜に無謀にもふ

らついているバンド少女に見えた。

「……どうした、」

やがて到着したインプレッサから森田ケイが降り立ち、声をかけてくれるまで、少女の自問自答は続いた。

「森田、わがまま聞いてくれる？」

インプレッサのアイドリングにかき消されそうな声で、相馬ひなは言った。

「らしくないな。」

森田にそう言われても、笑いもしなければ怒りもしない。

「そうね。らしくないかもね。」

「オレにできることなら、何なりと。」

「……ケイクんの部屋へ、お願い。」

「屋敷へは？」

「しばらく帰らないって、父には伝えてある。」

「……わかった。とりあえず、乗れ。」

「うん。」

後部座席に武装を納めたギターケースを落ち着かせると、ひなは助手席に座った。ものすごく久し振りに、インプの助手席に座った気がする。

（いろいろありすぎて、放置プレイだったもんな、森田のこと……。）

八月一三日の負傷以降、厳密にはその前、沖縄に旅行に行く前にケイの部屋で逢って以来、相馬ひなは森田と二人きりの時間を持っていなかった。吉田紗幸と和解した後は、ひな自身、森田に会ってもよいとは思っていたが、実際は、たまたま事情が許さなかつたり、気後れのよくな、罪悪感のようなものも一応はあつたりして、今日まで逢うことができずに来た。結局、もう二ヶ月も、二人は二人では過ごしていなかった。

「部屋にいたら、……」

「その話は、部屋に着いてからでいいか？」

ゆっくりと車を発進させながら、森田は言った。

「うん。」

森田ケイがひなの言葉を遮ったのには一応の理由がある。森田はこの移動中に、部屋で落ちて着いて向き合ってからでは伝えにくいであろう大事なことを、事務的に伝えておこうと思っていた。今日の事件の話でもなく、だが、二人にとつてはあまりに重大で、先手を取っておかないと言い出しにくくなりそうなことを、森田は伝えようとしていた。

インプレッサが流れに乗ったところで、森田は、そっと切り出した。いきなり、妙なことを言うように聞こえるかもしれないが、と断った上で、こう続けた。

「お前、オレに変な気を遣うなよ。こんな状況で、しかもオレが言うのも妙な話だが、た

たとえばお前に、オレの他に恋人がいたって、オレは驚かない。お前は自由でいいんだ。」

「え、ケイクン、」

森田も森田なりに、間が空いてしまったことを気にしてくれているんだと、相馬ひなは理解した。そして、窮地の教誨師の心理的な負担を軽減してくれようとしているのだということも、同時に分かってしまった。

いつもの森田ケイなら、そして、自分がいつもの相馬ひななら、森田は、そんな言葉は絶対に吐かない。

泣きそうだった。

「オレがお前を支えたいのは、オレの意志だ。だから」

だが、その言葉はひなの心の深い方を暖める。

だから、混ぜっ返す。

黙ったら、泣いてしまう。

「ケイクン、いきなり酷いよね。あたしの恋人って立場に未練ないように聞こえるよ？たかだか二ヶ月くらいの放置プレイでそうなっちゃうわけ？」

「……その発言については、一発くらい殴ってもいい気がするが。」

「ふふふ。 うん。 いいよ、殴って。」

無理に持ち上げたテンションを投げ捨てるように、呼気に乗せて吐き出した。森田の前で、

この状況で、無理にはしゃいでみせる必要はないのだ。

「実はそういう趣味だから殴れというなら、誠心誠意拳が腫れ上がるまで殴るけどな。」

「……それでいい。」

自然と、助手席側の窓の外を眺める姿勢になる。森田の方は、見られない。

「違うだろ。お前が殴りたいのは、お前のチームが機能停止したからだ。」

あっさりとして、ごくふつつの口調で森田はそう言った。

相馬ひなは、黙って俯いた。そして、言った。

「その発言については、あたし、泣いて抗議してもいい気がするけど？」

「ああ、そうだろうな。オレとお前が恋人どうしなら、全然ふさわしい言葉じゃない。」

「……もしかして、ケイクン、怒ってる？」

「ああ。いくらかはな。それと、戸惑ってモいる。」

「……ごめん。」

「お前が謝ることじゃない。オレが今むかっているのは、チーム・チャプレンという有能なチームを擁しているながら、センターが戦況をコントロールできるだけの準備をしていなかったことに対してだからな。」

「それは、あたしも同じだよ。はるみさんに、今回は紗幸ちゃんまで参戦してもらったのに、二人を負傷させ、戦局は向こうが有利で終わってる。二人とも、命に別状はないけれど、これ



から先、特に紗幸ちゃんは、学校とかどうなるか……。脚だって、後遺症が残るかも……。」

教誨師は、品川事件の頃と比べれば、格段に強くなっていた。戦術や身体的スキルの面だけでなく、精神的な強さ、一人のエージェントとしての、そして、相馬家を継ぐものとしての強さが少しずつ、身の内に育まれてきていた。苦しんだ時期も確かにあったが、この秋に入ると、ひなの成長は第三者からも認められるようになっていた。

それはしかし、教誨師・相馬ひなの毎日が、自由で苦悩の少ないものになっていくことを全く意味しない。相馬ひなが得た強さは、ひなのためのものではなく、多くのものを背負うための強さだからだ。

長年そばにいた森田には、そのことは十分分かっていて。

「お前にとっては、この事件が新しいチームになっての最初のヤマだったからな。責任も感じるだろうが、重要なのは、次、じゃないのか？」

甘いが必要以上に甘やかさず、現実的なコメントを返す。教誨師自身の判断を促す。思えば二人はもうずっと、こういう会話をしている関係だった。

「うん。」

「こんなことは、何の慰めにもならないが、チーム・チャプレンがいてくれたから、あの酷い状況の中で、死者一名だけで済んだんだ。そのことは、忘れるなよ。」

「うん。……ありがとう。」

森田の言うとおりだった。あの作戦にチーム・チャプレンが参加していなければ、少なくとも倉庫に詰めていた人間は、全滅していたに違いない。センターと公安の人員を、さらに大きな危機が襲ったに違いない。アサシンと後見人に対しての責任はあるが、教誨師は、森田同様、作戦全体ではしつかりと仕事はしていたのだ。

その自覚はしかし、相馬ひなの決心を押し上げる。

「それで、どうするんだ、これから。戦力的には一人、敵は行方不明だが健在だ。」

「別に一人ってわけじゃないよ。それに、あたしには、手がかりがある。」

「手がかり？」

「うん。それは、後でゆっくり、きちんと話す。」

「そうか。」

相馬ひなの、思い詰めたというのとは違うが、何か覚悟を決めたような口振りに、森田ケイはこのとき、ただ頷くしかなかった。

「で、戸惑いつて？」

ひなが、少しだけ軽い印象の声音で尋ねた。

「……それは、そのままの意味だ。」

「教えて。」

「教えてもいいが、それは部屋に着いてからでいいか？」

「……うん。」

車内の会話は、そこでふつつりと途絶えてしまった。

二人には久しぶりの、二人だけの、静かな空間が帰ってきていた。どんな「仕事」の後でも、以前はこうやって、二人で帰ってきていたことを、ひなは思い出していた。たいていは沈黙が気詰まりで、どうでもいいことをひながしゃべり倒しながらではあったが。

そうした日々、いつも、ケイクンはそばにいてくれた。

そのことを、ひなは確認し、そして、あこのころの絶望と今の絶望の質の違いを、思い知らされた。

殺人チームのパートナーとしてではなく、ただの恋人としてこの助手席に座るという、ただそれだけのことを願い、夢想しつつも諦めていた、いつかの自分。今にして思えば、全く諦める必要のなかった事柄を、自ら諦め、そしてそれを絶望だと思い込んでいた自分を、ひなは優しく抱きしめてやりたいと思った。

自分は、今、幸せだ。

だから、諦められる。

「ねえ。」

「どうした？」

「人通りのないところで、車を停めて？」

「何を考えてる？」

「別に。ただ、今すぐケイクくんがほしくなったの。」

土曜の朝が、やってきていた。東京ベイ有明ワシントンホテルの屋上、地上からは絶対に見えない位置に、中国南部に潜入しているはずの、九条由佳の姿があった。携帯電話も持たず、無線も使わず、何者かと会話している。

「どう？ 索敵できた？」

（もちろん。やつら、埋め立て地の、ガラス張りのドーム状の建物内にいる。中に木がたくさん植えられているような建物だ。）

九条にしか聞こえない声が返り、九条は少しだけ思案顔になった。

「……夢の島の熱帯植物館かしら。」

（建物の外観、見てみる？）

そう言っただけで声の主は視覚情報を繋いできた。

「そうね、当たりね。さて、どうしようかしら。とりあえず、時田に状況を尋ねるわ。可能なら、こちらから仕掛けてもいい。」

（それは危険。）

「どうして？まさか」

（ええ。劉黄綺、すでに起動させたらしい。）

「そんな、いつたい誰を依童に？」

（少なくとも、カライズではない。カライズは現在でも六人確認できる。娘、かもしれな  
いが、現状では確認は難しい。これ以上の情報収集は、索敵を感じられる可能性もある。）

「……分かったわ。監視を維持しつつ、引き上げてきてちょうだい。」

間に合わなかった。

大陸で、かすかに残っていた劉家の血の流れを追った。大陸は広いが、文化大革命以後も式  
神を錬成する技を継承している家など、劉家くらいのものだ。後少しで、その劉家の現当主で  
あると目される劉黄綺と相まみえるところまで探索を進め、そして、逃亡された。自分  
たちの動きを掴まれていた節もある。劉黄綺が、禁忌の一手を準備していたとの情報もあった。

それで、その行く先を推測し、あるいは肉薄し、あるいは遠ざかりながらも、何とか追っ  
きたつもりだった。

九条たちがついに突き止めたその場所は、昨日の銃撃戦の現場からもほど近い夢の島の、植  
物園の温室内部だった。おそらく劉黄綺とカライズ、そして劉が起動させたという何か、それ  
らは夜陰に乗じて首都高速湾岸線付近から移動した後、廃棄物の上に打ち立てられた植物園の  
葉陰にて、息を潜めている。

人類を遙かに超える跳躍力を持つカーラーズたちにとって、温室内部への侵入は容易だ。換気用の小窓さえ開いていれば、たとえそれがドームの天頂付近であっても、容易に潜入できる。後は、中から鍵を開けられる通用口を探すだけで、劉親子とカーラーズたちが潜伏する場所を確保できる。

「カーラーズが欠けていないなら、まさか、実の娘を、邪神にしたというの？娘を一度殺してから、復活させた？」

七月、ドクターこと賀茂秋善は、邪神化の奔流の中で自我を全力で保ち、教誨師に討たれた。だがそんなことは、ドクターと教誨師、そして鬼斬りとアマワキのウタキという要因がすべて揃って、初めて成し得た芸当だ。ただの人間を邪神化すれば、再生と超越の快楽の中で、瞬時に邪神化は進行し、人としての自我は消失する。そして、人類には制御できない怪物が、地上に出現することになる。

邪神側の協力があったにせよ、そこに教誨師がいなければドクターは完全に邪神化し、世界を破壊しつつ未ださまよい歩いていたはずだ。

だからこそ、それを斬り仰せた教誨師は鬼斬りと呼ばれ、特別な扱いを受けることになる。

だが、それから僅か二ヶ月半。世界は再び、邪神の誕生を迎えた。

今度の邪神は、誰かに討たれようとするような自我や理性は、有していないだろう。邪神としての本能のままに起動し、活動するだろう。持っているのはセンターへの、日本への、そし

てこの世への恨みだけだ。あるいは、その父親に対する恨みも。

時田に状況を尋ねた九条は、自らの離日後の状況も含め、必要な情報をすべて確認した後、告げた。

「現状、分かったわ。教誨師の参戦を期待し、これからひとまず監視に入ります。ただし、邪神の活動、出力等が確認された場合には、即時抗戦開始します。よろしい？」

済まない、よろしく頼む、という時田の台詞を確認してから、九条は式神たちに語りかけた。  
「どうやら昨日、邪神の起動前に、教誨師たちはカラーズに負けたらしい。ただ、劉黄綺の娘を殺したのはセンターの森田氏だったわ。だからその後で、死んだ娘を劉黄綺が邪神化した、ということのようね。」

式神たちにとっても、教誨師側、そしてセンター側の敗北は意外な情報だったらしい。九条の周りに相次いで出現した一二柱の式神たちを、重い沈黙が襲う。

「それで、これからだけど。教誨師の、鬼斬りとしての参戦を待ちたいと思います。ただ、それが間に合わない場合は、我々だけで邪神と対決するわ。それでいい？」

式神たちは頷いた。相手がカラーズだけであれば、今開戦しても負けることはないはずだ。しかし、敵の中心に邪神がいるならば、鬼斬りがいるに越したことはない。自分たちだけでは、活動を押さえるところまでしか期待できない。

黒が尋ねた。

「で、相馬ひなは今、どうしているの。」

「昨日の戦いの後、消息を絶つたらしい。本人は負傷なく健在だけれど、吉田さんと青木さんは重傷らしいわ。」

「そう……。それじゃあのコ、落ち込んでいるわね。これから、どうする気かしら。」

「そう、ベージュが言う。」

「分からないけれど、待てる場所までは待つてみたいの。すでに邪神が起動済みなら、今攻めても、活動開始を待つて攻めても、同じことだから。」

「そうだね。それでいい。」

青が言つて、打ち合わせは終わった。

「それにしても、教誨師たちが遅れを取るなんてね。カライズも成長してきているのかしら。」

九条は、正直に困惑を口にした。

「違うと思う。要は、場数不足。それも、対魔戦の。」

濃紺がそう言った。ベージュとバイオレットが、状況を補足する。

「水原さんも、今いないもんね。」

「そうだね。シベリアって言つてた。」

「教誨師とセンターと公安、悪くないけど、対魔戦に九条・水原抜きじゃ足りなかったってことか。」



「どうも、そのようです。」

全員が、声のした方を一斉に振り向く。

そこには、神社本庁のエンジニアント、水原環が立っていた。

「自分のことを買いかぶるつもりはありませんが。」

「気配消し過ぎよ水原さん。ロシアからはいつ？」

九条が笑って言う。

「夕べ遅く新千歳に降りて、朝一番の便でついさつき羽田に。」

水原も、ただの友人同士のように笑い返す。実際彼らは、同じ世界に棲む、釣り合いのとれた友人同士だった。

「収穫は？新しいタイプの霊的な指導者さんとやらを見つけれられたの？」

「どこまでお話ししてたでしょうか。本庁の指示もあつて、ニブフ、ユカギール、ウィルタと  
いったシベリア圏マイノリティのシャーマンを、そうね、一〇人以上尋ね歩く予定でしたけれど。途中で切り上げて帰ってきました。なぜなら」

水原環は、少し大げさに肩を竦めて見せた。

「次の指導者はお前の国、日本で生まれるはずだと、どのシャーマンも笑って言うんです。」

「ん？ 謀略があつたのか？」

黒が尋ねる。

「それはまだ、分かりません。でも、だから、この一件が終わったら、私はこの時期に私を国外に送り出そうとした人物を洗い出すつもりです。本庁の中か、それとも未来読みたちに外から干渉した人間がいるのか、まあそれはこちらの事情ですので、あなた方は聞かなかったことにしてください。さっさといいのですけれど。」

「なんなら手伝うわよ？ご助力への謝礼として。今回、参戦する気に来てくれたんでしょ？帰朝報告を先延ばししてまで。」

「もちろん。ふふふ　それじゃ、面倒なことになったらお願いさせていただきますね。」

お互いに笑い合い、そして二人は真顔になった。

「あなたがいてくれるなら、試したい術があるの。たぶん今回、必要になるはずの、術が。」

「了解しました。きつと、ろくでもない技なんでしょうね。」

式神たちはその水原の言葉を聞いて、ただにやにやするばかりだった。

「水原さん、なんか品がなくなった気がする。」

やがて赤がぼつりと言うと、水原は笑った。

「相馬様のお屋敷での出来事からこつち、わたしも変わってきた自覚はありるけれど　。で

も、品がなくなっただけのは聞き捨てならないわね。」

そう言って、さらに笑った。

相馬ひなはこの朝、秩父の大叔母、相馬みさをのもとにいた。

深夜の車内で、そして秩父に向かう途中で入った国道沿いのホテルで、森田ケイを自分の中に何度も迎え入れて、ほぼ睡眠も取らず、ひなは大叔母のもとにたどり着き、その胸に崩れ落ちるようにして、眠った。

「おばさま、あたし」

それだけを言うのが精一杯で、玄関先にひなは立ち尽くし、涙をこぼした。みさをが何も言わず、抱きしめてやると、そのまま失神するかのようにして、眠ってしまったのだ。

みさをの許可を得て、八畳ほどの座敷に森田は布団を敷き、ひなを寝かせた。

森田ケイにとっては、大叔母の叱責、相馬家による処分を覚悟しての秩父入りだった。むろん、その覚悟など、とっくの昔に終えている森田ではあったが、自分の行動にもっとよい選択肢はなかったのかと、このときになつての逡巡はあった。

しかし相馬みさをは、目に涙を浮かべ、そして、こう言った。

「森田、ありがとう。ひなを受け止めてくださって。辛かったでしょう。お前も、休みなさい。」  
いえ、とだけ答えて、頭を垂れた。

「みさを様、よろしければ、自分はここで。」

ケイは、眠るひなのそばに、胡座を掻いて座った。座ったまま、目を閉じた。

夕べひなが、道脇に停めたインプレッサの助手席で自分に言ったことを、思い出す。

「お願いが、あるの。おばさまのところに連れてって。」

「手がかりというのは、それか？」

森田は尋ねたが、直接の答えは返らなかった。少しだけうわずったような、硬い調子の声が返る。

「ケイクんごめん、あたし、おばさまのところで、死んでくる。だから最後に、あたしをあたしから、解放して？あたしを、あたしでないただの女にして？そうすればあたし、」

どれだけ思い詰めれば、どれだけ覚悟を決めれば、一七歳の少女がこんなことばを吐くようになるのだろう。本来なら、何不自由なく安寧に、悠然と暮らしていられるはずの、明治維新以前から続く名家の一人娘だというのに。

「そう言われて、おれが納得すると思うのか？」

「思っていない。あたしだって納得してない。もっと二人で、平和に、ただの恋人どうしみたいにおつきあいしたいよ？」

「だけど、今はダメ。」

「あたし、ブチ切れてるから。」

そう言ってひなは、躊躇なく森田の股間に手を伸ばし、顔を埋めてきたのだった。

ケイはあえて、そのひなの髪を筆るように掴み、顔を上げさせた。

ひなは、泣いていた。泣きながらケイの体にしがみつき、首を左右に振った。

森田ケイはひなのその様子に、自分の行動の指針を読みとったのだ。後先のことは考えず、ただ、ひなの心を埋めることに専念することにしたのだ。

相馬ひなが目覚めたのは、昼近くであった。

「起きたか？」

「……ケイクン。おばさまは？」

「今、お呼びしてくる。」

「うん。」

やがて、みさをがちよつとした菓子類とお茶を乗せた盆を手にしてやってきた。

「ひなさん、ずいぶんよく寝てらしたわね。おなか、空いたでしょう？まずはおめざでもいがかかしら？」

すでに起きあがっていたひなは、素直にその厚意に従った。ありきたりの大福の味が、何故か体中に沁みるようだった。

「もしかして、これ、」

「そう。お砂糖以外は全部、この辺りの土地の材料で作った、手作りの大福よ。変な混ぜものは一切入っていないから。おいしいでしょう？」

お茶を飲み、口の周りの粉をみさをに笑われたりしながら、一息ついたひなは、明るい笑顔

のまま、こう、告げた。

「おばさま、お願いがあります。あたしを、相馬の巫女として、覚醒させてください。」

「何を言い出すかと思えば、そのことですか。……一つ伺いますが、吉田はどうしてしていますか？」  
ひなの笑顔は当然曇った。

「吉田は、昨日の仕事で負傷し、病院の集中治療室に入りました。意識不明の重体となっていますが、意識が戻れば、数日中には通常の病室に移れると思います……。」

「やはり、そういう事態になりましたか。青木もですか？」

「青木も、入院しました。数力所骨折しています。」

相馬ひなは、紗幸さん、はるみさんではなく、彼女たちを姓のみで呼んだ。馴れ合いを排し、彼女たちの主としての自覚を、その言葉に滲ませていた。

「そしてあなたは、無傷の自分を責め、彼女たちに付いてやることもせず、自暴自棄になつて森田のところへ？」

低く押さえた声で、あえて否定的な内容で相馬みさをが尋ねる。その表情に笑みはない。

「違います。自分が無傷であることを、恥とは思いません。青木も吉田も、あたしが傷つくことを良しとはしないはずですから。あたしが森田に体と心を預けたのは、別の理由です。」

「言つてごらんなさい。」

「森田には、酷い言葉になるかもしれませんが、一言で言つてしまえば、覚悟を決めるため

す。何かを忘れるためではなく、自分の中の強い思いを確認し、その上で、次のステップへと進むための。もちろん、自力で、一人で覚悟できないのは情けないことであるかもしれませんが。……でも今は、泣いても喚いても、どんなにみつともなくても、浅ましく見えても、前に進むべきときだと思います。森田は、たぶん、あたしのそういう気持ちを分かっている、それに付き合ってくれました。進むことを恐れ、立ちすくむあたしを、ひたすら受け止めてくれました。そして、そのままこちらへ伺って、このおばさまのおうちで寝かせてもらって、もう、自分の中に揺らぐ部分は、なくなりました。」

「そうですか。」

みさをは、表情こそ重たいものを湛えているが、毅然と顔を上げて話すひなの顔をまじまじと見ていた。ひなは、ひななりの思考の道行きを辿り、今、ここで真摯に、自分に助けを請うているのだということ、理解した。ならば、とも思った。

「しかし、吉田がその状態では、浄めの儀はできませんね。」

「はい。それで、おばさまにお伺いなのですが、多少無理でも、あたしを覚醒させてしまう方法を、ご存じではありませんか？ CCLのある術者は、素質のある者を選んで強制的に巫化し、使役したと言います。おばさまも、そうした方法をご存じなのでは？」

この夏、九条由佳回収を企図して入国したCCLのリーザ・マクベリックという女は、その作戦遂行に際して、天界人羽教祖の姉、北嶋ルーナを強制的に使役していた。相馬ひなは、

そのことを念頭に問うたのだ。

みさをは黙って頷いた。

「ええ、知っています。ですが、危険な技です。」

「かまいません。あたしに今必要なのは、単身で六柱の式神とやり合う力、そして、鬼斬りとして必要な力です。」

「タベ邪神が生まれたのを、あなたは知っています？」

「……いいえ、」

突然の問いに、ひなは一瞬の戸惑いを見せた。状況が変わったと言って、自らの申し出を取り下げても何の不思議もない、重たい情報が、提示されたのだ。

邪神の出現は、戦いの前提を根こそぎ替えてしまう。

そのことによって、戦術の変更が行われたとしても、誰もそれを咎めることはない。

それほど、邪神の存在は重く、大きい。

相馬ひなは、だが、その決意を翻さなかった。

「でも、そうですね、邪神がまた。ならば、なおのこと、」

「その件、お前が寝ている間に、センターからも連絡があった。急遽帰国した九条と式神たち、そして水原がカラーズおよび邪神を監視下に置いている。追って、公安のサポートも入るはずだ。」



相馬ひなは、首を横に振った。

「でも、とどめの一手は、彼らにはありません。そうでしょうか？おばさま。」

みさをは、答えず、別の質問をした。

「……ひな、もう一つ訊きます。あなた、吉田と青木の報復のために、自らを強化しようとしていませんか？」

「相馬を継ぐ、責任ある者として模範的な回答ではないのかもしれませんが、そのご質問の答えなら、その通りです、とお答えします。家族同然の人間を痛めつけられて、黙っているほどのお人好しになるつもりはありません。ですが、その報復の気持ちだけで、おばさまにお願いに上がっているわけではないのです。」

すう、と一つ息を吸い、一度、大叔母の眼を見つめた。そして、教誨師は己の覚悟を告げた。「教誨師は、チームのリーダーであり、鬼斬りでもあらねばなりません。自らを強化することでチームが再建できるなら、そして、鬼を斬り魔を断つことができるなら、あたしは、もう、今の日常を、失っても、いいのです……。それで、皆を、守れるならば。」

結局、相馬ひなの中心はここだ。

仲間のためにできることをする、それだけだ。

決心を口にする、心に押さえがたい波が立ち、思わず涙が溢れそうになる。だが、堪えた。覚悟はもう、済んでいるはずだ。

「ひなさん、ごめんなさい。わたくしが、相馬の次の巫女はあなただと言ってしまったばかりに、あなたをそこまで、追い込んでしまいましたね。」

ひなは首を左右に振った。

「おばさま、それは違います。おばさまのそのお言葉のおかげで、あたしはまだ、戦う気持ちを保っているのです。そうでなければ、立ち上がりたくても、立ち上げられるだけの材料がなければ、ひなはもう、……。」

ひなは、本音となるものを正直に吐露していた。必要なのは、戦うモチベーションを維持できるだけの戦闘スペックだ。それを得られなければ、シビアな戦況判断を行うよう訓練されてきた教誨師には、立ち上がる理由がなくなってしまう。

だから、必要なのは、勝算だ。勝算ゼロでも立ち上がるのは素人であり、それで勝てるのはファンタジーの世界だけだ。教誨師の住む世界は、それほど甘くはできていない。教誨師は、その、戦うには必須の条件となる勝算を得るため、自らの巫女としての覚醒を望み、またそのことについての覚悟を決めたのだ。

「分かりました。……さらに確認しますが、あなた、巫女として覚醒すれば邪神と渡り合えると考えていますね？根拠はあるのですか？」

「はい。奄美のとき、巫女が認知できる世界を少しだけ、覗いてきました。あのレベルでもう一度カラーズに立ち向かえば、一人でも十分倒せます。また、もし邪神がカラーズとともにそ

「ここにいるのなら、あのレベルでなければ、おそらくは全く話になりません。」

「勝てないかも、しれませんか？」

「勝ちます。勝たねばなりません。それに」

「教誨師は、ふっと笑った。」

「あたしは一人ではありません。助力を請うことができる仲間がいます。」

「みさをは、静かに頷いた。そして、こう言った。」

「最後に、もう一つだけ聞かせてちょうだい。あなた、そのご覚悟を、嶺一郎には？」

「何も伝えていませんが、ただ、吉田と青木がやられたことに対しての、教誨師なりの対応はすると伝えてあります。」

「みさをは、すでにひなの覚悟については及第点を与えていた。」

「森田、あなたには済まないけれど、昼食が済んだら、今日の夕方まで、この家で控えていていただけなにかしら。」

「では、おばさま、」

「ええ。あなたのための儀式を行います。ただし、それまでに、あなたにまだ伝えねばならないことがあります。」

「何でしょうか。」

「その前に、簡単にお昼にしましょう。術が始まれば長丁場、腹ごしらえは必要よ。」

すでに正午と言うよりも午後一時に近い時間帯であった。それから簡単な昼食を三人で摂り、女二人が水垢離を行い着替えを済ませると、午後三時近くになっていた。

みさをの家でも一番重要な、床の間を控えた一二畳ほどの座敷に、白装束の相馬ひなと相馬みさを、そして森田ケイが座っていた。

「ひなさん、あなたに話さなければならぬことというのは、あなたのお母さん、涼子さんのことです。その話を聞いて、あなたがまだ、覚醒の時を欲するのであれば、わたくしも覚悟を決めましょう。」

相馬ひなは、ただ黙ったまま両手をついて、深々と礼をした。

「自分は席を外した方がよろしいでしょうか？」

「いえ、森田も、聞いてください。これからわたくしがひなに施す術の危うさを、話します。あなたに隠してひなにその術を行う気はありません。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」

その森田の応えを聞くと、相馬の家の古き巫女である相馬みさをは、居住まいを正し、少し遠くを見るような目になって、語り始めた。

「この術は、もう二度と行うまいと、思っていました。実は以前一度、行ったことがあるのです。」

ひなの母、涼子は、美しく、また優しい娘でした。嶺一郎とは、互いが互いを大事に慈しみ

合うような、ありきたりだけれども落ち着いた夫婦として、暮らしていました。

ただ、ひな以外に子どもができなかったことを、涼子は気にしていたようなのです。涼子とて、相馬の家の家業を知らないわけではありませんし、それには男児誕生をと、当人も望んでいた節があるのです。

わたくしたちは、その涼子の気持ちに、気づいてやれませんでした。そしてまた、屋敷には、女兒ならば相馬の巫女として生きることが期待する者もありました。しかし、嶺一郎は、ひなに相馬家を継がせ、巫女についてはこのみさをが健在の間は引き続き巫女として務めるものとして、決めてしまいました。

その決定は、間違っていたと、わたくしは思います。ですが、屋敷の古い大人たちが、この嶺一郎の決定に不満を漏らすのを、わたくし自身、耳にしたこともあります。相馬は、単なる武の家とは違う、巫女、つまりわたくしなき後、嶺一郎様はいつたい新しき巫女として誰を据えるつもりなのだろうと。そうした女を愛人として迎えてもいいのではないかと。

あるいは、そんな話が、うっかりして涼子の耳に入ったのかもしれない。そんな不幸が起こった日が、いつかあったのかもしれない。

嶺一郎は望んでいませんでしたが、ある日、涼子は自ら、新しい相馬の巫女となるべく、志願したのです。わたくしはそれを、喜ばしいこととして受け取ってしまった。

みさをは、痛切な悔恨を伴う過去を、一つ一つことばに換え、語っていった。もはやひなも

ケイも、古き人の古物語りを聞いて育ったような世代ではなかったが、みさをの語りはさながら、相馬という家の来歴を語る神話を聞くようであった。

「もし、相馬ひなという娘が、この相馬の当主となるならば、その先々を見守ってゆく巫女が必要になる。みさはこうして今も長らえています。あなたが成人するあとほんの何年かの間にも、この寿命が尽きるかもしれせん。ですから、巫女に志願する者が現れたことは、わたくしにとっても相馬にとっても、喜ばしいことだったのです。そして実際、涼子は巫女としての資質に恵まれた女であるように、わたくしには見えたのです。

ですが、わたくしは、術の危険を知っていました。そしてそのとき、相馬の家にキヨメノヒメはいなかった。ですからわたくしは、涼子とともに五十日に渡る物忌み潔斎の日々を送り、ある夜、涼子に術を施しました。

涼子は確実に巫化し、そして、発狂しました。

涼子は、巫女として生きるには、やさしすぎたのかもしれない。資質は、あつたと思つています。また資質があつたからこそ、涼子は巫化し、そして世界の有様を知り、自分というものを保てなくなつたのです。世界は、涼子が願っていたほど、やさしくなかつた。

まだ幼いあなたを残して、正氣に戻らぬまま涼子が自ら命を断ち、あなたがやがて青木はるみというメイドに出会い安定するまでの幾とせかの間、わたくしも何度、涼子の後を追おうと思つたことか。でも、嶺一郎は昔から察しのいい子でね。その度に、頭を下げにやってく

るのです。ひなを、見守ってやってください、嶺一郎はただ、それだけを頼み続けたわ。最愛の人を殺した、このみさをに対して。」

初めて聞く、相馬の家の秘密であった。あるいは、大人たちは皆、知っていたのかもしれない。しかし、それをひなには一言も伝えずに来た。

言えるはずもない。

娘を後継に指名した父の決断と、その娘の巫女となって娘を守ろうとした母の優しさ、そしてその美しい気持ちを受け止めた大叔母の善意の行為とが、ひなから母親を奪ったのだということ、どうやって、どのように伝えよと言うのだ。

相馬ひなは、ただこのことを神話のように聞いたわけではない。

実の母との微かな記憶、封印してきた幸せな日々が立ち返る。

森田ケイは、相馬ひなよりは六歳年上だったが、この「事件」のことはほとんど記憶にない。十分記憶にあつてよい年齢だったが、その辺りはおそらく、屋敷の大人たちが徹底して隠したのだろう。覚えていることと言えば、涼子様の葬儀で、ぽつんと一人、泣きもせず、祭壇の遺影の前に立っていた喪服姿の相馬ひなの姿だけだ。

森田の家には、物心ついたときには母親はいなかった。その事情をきちんと聞く前に、森田の父は他界したが、それも確か、涼子様の葬儀の年だった気がする、ふと思った。

「あの頃は、相馬の家に不幸が続きました。森田さんのお父上が、嶺一郎とともに行った作戦

で敵の強襲を受け、嶺一郎をかばいつつ亡くなったのも、同じ年の春だったのです。」

今やひなは、涙を堪えなかった。堪える必要を感じなかった。

自分を守るために母は死んだ。

自分の父親を守るためにケイの父は死んだ。

お父様、お父様

その喪失の中で、父嶺一郎は屋敷を保ち、ひなを育て、やがては相馬を継ぐものとしての資質を磨いてきてくれた。思うようにやらせてきてくれた。

お父様、そして、お母様

「ひなさん、相馬は、悲しい血筋なのかもしれません。こんな時代には合わない、血なまぐさい家業を持った、無惨な伝統の家なのかもしれません。でも、絶対忘れないで。あなたの父、そしてあなたの母ほど、あなたを愛している者はいません。」

「はい……、おばさま。忘れません。この戦いが終わったら、父と、二人でゆっくり話したいです。お母様のこと、相馬の家のこと、あたしのこと……。」

「おお、そうですね、そうなさって……。」

相馬みさをは、涙を抑えつつ、ひなの方に向き直った。

「最後にもう一度、尋ねます。それでもあなたは、あなたから母を奪ったこの術を受けますか？もう一度嶺一郎を、絶望の淵に叩き落とすかもしれない、この術を受けますか？」



「はい。お願いします。」

そこに、一切の淀みはなかった。

「生やさしいものではありませんよ？涼子でさえ、耐えられなかった。」

「……これが、このあたしの選択が、正解なのかは分かりません。でも、あたしの中には、消せない欲望のようなものがいくつもあります。みんなを守りたいというのも、それだって幼稚でわがままな、欲望みたいなものかもしれません。」

森田にはどう謝ったらいいか分からないけれど、あたしは、森田だけじゃなくて、紗幸ちゃんも欲しい、そういう女、そういう人間なんです。欲深い、ひどい人間だと、自分でも思いません。

あたしは、涼子ママみたいに、何日も、身を清めたりしていない。そうしようとも思わない。この手はいつも血に汚れているし、この体はいつも浅ましく発情している。そういうのは、拭っても拭い去れるようなものじゃない。まだ、……森田のだってきつと、おなかの中に残っている。

でも、だから、信じます。あたしは、あたしのまま、帰ってきます。覚醒して、邪神を殺してから、帰ってきます。

おばさまも、信じて。あたしは、あたしの自我は、ちよつとやそつとじゃ壊れない。

これまで、見習いエージェントとして生きてきた数年間、あたしなりに試練はいくつかあり

ました。そして、この一年、後に邪神となるドクターを殺し、品川では狙撃され、南の孤島では邪神を斬り、新宿では友達に刺されもしました。友達の家族も、殺しました。苦しんだけれど、それでもあたしはあたしそのまま、すべてを投げ出さずに生きてきたつもりです。

そして、それができたのは、おばさま、お父様、はるみさん、屋敷のみんな、新しい仲間、そしてケイクんと紗幸ちゃんがいいたからです。

紗幸ちゃんがいれば、あたしはあたしに戻れます。

ケイクんがいれば、あたしはただの女の子に戻れます。

身勝手だけど、それがあたしなんです。二人を踏みつけて、優しい二人を踏みつけて、あたしはもう一度、生まれ直す。生まれ直して、父や、屋敷のみんな、仲間たちを守りたい。

だからおばさま、お願い。あたしの願いを聞いて。」

相馬みさをは、このひなのことばを、眼を閉じて聞いていた。そしてそのまま、微笑みを浮かべると、すうと、目を見開いた。優しいながらも重みのある声で、みさをはなお、問うた。

「分かりました。ほんとあなたには、呆れてしまいますね。帰ってきたあなたの世界が、相変わらずの修羅の道であっても、後悔しませんね？」

「ええ。新しいあたしの力が、今必要ならば。あたしは笑って戦って、笑って帰ってきます。」  
遂に、相馬の古き巫女は、その意を定めたらしい。

「よろしい。森田、済まないけれど、下がってもらえますか？」

「かしこまりました。」

そのケイに、ひなが深々と頭を下げる。

「ケイクン、ごめん、あたし、ひどいこと、」

ひなには見ることはできなかつたが、森田はこのとき、微笑んでいた。

「分かつてる。気にするな。そういうところも、お前の魅力のうちだ。ただ、  
　　事が済んだら、帰ってきてくれ。」

はつと顔を上げたひなは、ただ一言、

「うん。」

そう応えるのがやっとであった。

すつと障子戸が閉じられた。板張りの廊下を踏む森田の足音が遠ざかる。

みさをが、つぶやくように言った。

「あなた、わざと紗幸さんのこと、口にしたでしょ？言う必要はなかつたのに。」

「……はい。隠し事があるのが、もうあたしには耐えられません。そんなものを抱えて、向こう側には行けません……。」

「ちゃんと、結婚しておあげなさいよ。」

「ケイクンが、そう、望んでくれるなら。」

ぽたぽた、と畳の上に涙が落ちた。

相馬ひなの覚悟は、定まっていた。

それでも溢れる涙は、自らの罪深さを自覚するが故の、贖罪すら望むべきでないと知る故の、ただ一つの声無き発露だ。

「ひなさん、あなたを誉めるのも認めるのも簡単ですが、それは、」

「ええ。おばさま。それはあたしがここに、帰ってきてからにさせていただきます。」

「ええ。」

長く相馬の巫女として生きてきた女と、これからその役割を継ごうとする女とが、視線を交わし、微笑みを交わし、頷き合った。

「では、始めましょう。」

相馬ひなは、みさをの前に深々と額付いた。

「あなたは、あなた自身と、あなたの大切なものを思い描き、決して意識を失うことのないように。」

「はい。」

「新しく見える景色の意味をすぐには問わず、考えず、ただあるがままを見、あるがままを受け入れるように。」

「はい。」

「術直後のあなたの魂は、赤子のように強く泣き叫び、赤子のように無力であるかもしれませ

ん。その間の護りは、この相馬の古き巫女、みさをが一命を賭して保ちます。」

「はい。よろしく、お願いいたします。」

みさをが立ち上がり、正座する相馬ひなの背後に回る。室内の、空気が変わる。

「恐れるな。受け入れよ。」

「をを。」

「躊躇うな。解き放て。」

「をを。」

イニシエーションの応答が進む。特に型や決まりの文句があるわけではない。みさをの判断で、今のひなに必要な言葉を届けている、それだけだ。

術は一瞬。

その心構えを、膠を塗り重ねるように蓄積していく。

その一瞬を外せば、術は歪む。

みさをとひなの、まさに呼吸を合わせるような作業が進む。

やがて、みさをの言葉が、人語の範疇から外れ始める。

発声法からして、変わり始める。

識閾下にのみ働きかける、非可聴域の倍音が溢れ出す。

ひなの心の深いところが、ざわめく。叫ぶ。まろび出る。

ひなは畳の上に胡座を掻き、さらに両手のひらを膝の前につく。みさをの指示はなくても、そうすることが自然なのだと分かった。むしろその姿勢でないと、苦しくて仕方がなかった。

それは、魂が覚醒の時を待つ姿勢だった。

新しく生まれ直すひなの魂は、きつとそこから一度旅立ち、そして、もう一度そこから、もといいた場所に戻るであろう。

（機は熟した。涼子、ひなを護りなさい。）

ひなの左右それぞれの肩胛骨と背骨の間に両の手のひらを当てて、相馬の古き巫女は己の靈力のありつたけを、たった一つの願いに換えて撃ち込んだ。

背中の殻を、割った。

刹那、獣のような叫び声。

何かが障子を突き破り、庭先へと吹き飛ばされた。

控えていた森田が駆け寄ると、それは、相馬みさをであった。

「わたしは大丈夫、ひなを、頼みます。」

みさをはそう言うと、裏山の方角を指さし、そのまま気を失った。

日中はただ静かに、不気味なほど静かに過ぎていき、早くも、夕闇が迫っていた。昨日に続

いて、都内の空とは信じられないほどの、きれいな夕焼けだった。

それまでじっと、邪神たちの動向監視を続けていた水原環が、急に空を見上げ、次いで、何かに耳を傾けるような仕草をした。

「九条さん、今の、聞こえた？」

問われた九条由佳が応える。

「ええ。何かの叫び声のようなものが、聞こえた気がしたけれど。」

二人の周囲に佇んでいた式神たちが、突如、不思議な舞を舞いつつ、節を付けて歌い始めた。

「覚醒せしは相馬の娘」

「覚醒せしは鬼斬りの娘」

「今宵十六夜月見の宴」

「今宵十六夜鬼斬らむ」

「どうしたのあなたたち。」

九条が問うと、すつと覚めたように舞いの輪から抜けたベージュが答えた。

「分からない？覚醒したのよ、相馬ひなが。」

「何ですって？」

驚く九条にベージュは続けて何かを告げようとした。

「厳密には」

しかしそれは最後まででは語られなかった。彼女たちの直近で、異変が生じたからだ。

「ちよつと待つて、これは」

水原が状況確認に入ると同時に、式神たちも一斉に対応を開始した。

「来たわね、こっちの姫もお目覚めのようよ。」

「まさか、今のに反応した？」

「検証など後でもできる。今は、押さえるしかない。」

一二柱すべての式神の感覚と思考を己に繋いだ九条が、即座に判断を下す。

「全員で、夢の島へ飛ぶわよ！ カラーズは対応優先順位降格、全力で邪神を押しとどめる。夢の島上空へ移動とともに館全域をロック、攻性の結界を展開。わたしと水原は館正面へ落とし！」

式神たちは長い監視に飽いていたのか、嬉々として対応を進めていく。

「紛い物とはものが違うつてところを見せてやるわよ！」

「あはは、撃ち落とされるなよお！」

「いくよ、展開！」

ワシントンホテル屋上から、式神たちと二人の女は唐突に消えた。そして次の瞬間、夢の島熱帯植物館の上空に、少女の姿をした一二柱の神が出現した。先ほどまでは思い思いの、言ってみれば旅支度用の普段着だった式神たちは、皆、白い、琉球の神女のような装束を身に纏っ



ている。天湧のウタキのときと同じ、これが彼女たちの戦闘服なのだ。袖口の、梯子リボン状の紐の色だけが、全員異なっている。

式神は全員で一つの円を構成する。地表に向けて水平に保たれたその円の中央が、眩く輝きを増していく。

「このまま一射目放つ！」

「攻撃対象認識、天蓋ごと行くぞ！」

薔薇と深紫が指示を飛ばし、式神たちの容赦ない一撃が植物館の天蓋を粉々に砕いた。

邪神たちに向かって、そして、霊的なものに守られていることも知らず、日々を安穏と暮らす人間たちに向かって、それは高らかに開戦の時を告げていた。莫大な音量の爆発音、破碎音が辺りに容赦なく広がっていく。熱帯植物館は、この一撃ですでにミサイルでも着弾したような有様になった。

公安から警視庁を経由した指示により、この日、熱帯植物館は臨時の休館になっていた。それがなければ、こんな攻撃はできない。館内に生身の人間がいれば確実に死ぬ。それほど思い切りのよい攻撃だった。

だがその着弾地点、植物館のドーム内から複数の迎撃があった。応射しつつ、カライズが全力で跳躍してきたのだ。

上空で自由落下しながら、式神たちが興奮した口調で口々に叫ぶ。

「ああ、あれなら教誨師たちがやられるのも分かるわね！」

「空中戦とは思わないもんね！」

「再上昇！」

「第二射用意、狙いは劉黄綺！」

このときカラーズは迎撃のため跳躍していた。つまり地上の邪神と劉黄綺は、護衛を欠いた状態だ。

「位相干渉あるけど？」

「捻ってるのよ！」

「行くよー！」

「つてえ！」

誰かが叫ぶ。式神が形成した回路を経巡っていた何かの力が、陣中央に集められ、射出される。

次の瞬間、また誰かが叫んでいた。

「散開！」

地上から、明らかに彼女たちとは別の力が撃ち返される。カラーズの散発的な迎撃とは違う、莫大な力の放出。

「っひょー！すごーい！」

「こりやマジでヤバいかもね！」

（あなたたち、なんではしゃいでるの？）

興奮した口調の式神たちに、先に地上に現れて即席の陣を展開していた九条から、呆れ顔の念話が入る。

（なんだろう、邪神の余ったパワーでこの辺一帯ヤバいことになってる。）

（気をしっかり持て、呑まれるぞ、みたいな台詞言ってみたい！）

（今言えばよかったじゃん。）

（あー……）

地上へ退避した式神たちと九条・水原のコンビは、内側に向けて攻性を示す結界を展開・維持しつつ、状況の整理を行った。ひとまず今の交戦も、邪神の砲撃以外は結界内に封じ込んでいる。式神たちが陣の安定のために植物館の周囲に散開したため、コミュニケーションは念話になる。

（邪神の覚醒は十分のようね。）

（ええ。分かってはいたことだけど。）

（ヤツの主砲というのも変だけれど、あれは何？）

（一応結界は反応したけど、大半はすり抜けて上空に達していた。）

（だとすると、おそらく霊力と何かの力を練り混ぜ固めて弾いたような代物だね。純粹な物理

兵器じゃないけれど、生の霊力でもない。どちらか片方なら押し留められるはず。」

（結界に囲まれたのを知って、調整してきたのかな。）

式神のディスプレインを受けて九条が判断する。どうもこの手順が、彼女たちには効率がいいらしい。

（了解。いずれにしても我々はここで邪神を押さえ込む。殲滅は目指さないが、可能ならばいつでも殺るつもりで行く。いいかしら？）

（諒。）

代表して黒が応えた。それを確認すると、九条は隣に立つ水原に、直接口頭で依頼をした。

「水原さん、済まないけど、即席でまたあれをやってもらえないかしら？」

「品川のときのあれかしら？」

「ええ。あの絶対量を、縊り固めてから叩きつけてみたいの。」

「分かった。やりましょう。」

そう応えると、水原環は印を数回結び、己の内の霊力を一気に励起させた。神道本来のやり方ではなかったが、この懐の深さも彼女のスキルのうちだった。

水原と九条が頷き合い、準備が整う。

作戦開始を九条が告げる。

（これより標的正面に即席の陣を展開、回路を完全に充填後、水原さんの霊力を投入して射出

します。靈力レンズ、屈折率調整まで一〇秒とせよ。）

（了解。完了。精度予測、着弾点半径一七センチメートルまで可能。）

（標的脊椎に沿って射込め。脳や心臓、肝臓は疑わしい。）

（了解、修正完了。）

このやりとりの間も、九条の靈力が式神たちの形成する回路に流入し続けている。やがて、回路が不正に空間を歪めるような、ビシ、ビシ、という音が聞こえ出す。赤が告げる。

（回路横溢、これ以上は撓みます！）

（水原さん！）

水原が、ほんのわずか、印を結んだ指先を前方に倒す。その刹那、張りつめ溢れ出ようとする九条の気を丸ごと叩き潰すような勢いで、水原の気が放出された。それはすでに張り切った式神の回路を吹き荒れ、もはや廃墟と化した熱帯植物館直上一五メートルの位置で収縮したかと思うと、一気に大地に叩きつけられた。

回路を維持する式神の一部、屈折のために靈圧が集中する方位のバイオレットや赤、薔薇たちが血を吐くほどの、そして、九条ですら一瞬意識が落ちかけるほどの、高圧で暴力的な靈力が撃ち込まれた。

莫大な粉塵が上がり、視界が失われる。

「くっ、まだだ、索敵……！」

「邪神、健在、カラーズ、六人健在、劉黄綺……健在！」

九条たちを失望ではなく疑念が襲う。

「生身の人間が巻き込まれて耐えられるパワーじゃないのに……」

インディゴがつぶやく。疑念の中、九条が一つの可能性に気づく。

「劉黄綺、邪神を御するというの？邪神に命じて防御させたとして……。」  
水原も言う。

「でもそれでは、主従が逆転していることに。」

爆心地と呼ぶにふさわしい有様の、着弾点の方から、男の声が響く。

「その通りだ。これはただの邪神ではない。これは、邪神兵器だ。邪神としての力を備え、我が指示に従う、つまりは兵器なのだ。君たちが何者なのかは知らんが、制御のできない無垢天然の邪神など、生み出してもしかたあるまい？我々に必要なのは、制御可能で圧倒的な力なのだからな。」

「お説ごもつともだけれど。その術に破綻はないの？」

代表して、九条が問い返す。劉黄綺は、落ち着いた声で応じた。

「ない。むしろ、私を倒せば邪神は暴走するが、それだけだ。自分の死んだ後の世界まで、面倒を見てやる気はないからな。」

これで、先に劉黄綺を倒してしまう選択肢はなくなった。ハツタリの可能性もあるが、劉黄

綺の言うとおりだとすると、劉黄綺を倒すことで世界を一つかける選択をする事になってしまふ。

「……あなたは、この国でカラーズと呼ばれている、人と式神、大陸風に言えば鬼神の混種を作った。混種は成長し、立派な戦力になった。それだけでは飽きたらず、今度は、この世界に棲む人間なら誰でも知っている、最高レベルのタブーに手を出した。そうまでして、ほしいものは何？地位？権力？」

「そうしたものは、そうだな、あればあったで別にかまわないが、私がほしいものは、少し違うものだ。あえて言えば、神話と歴史、と言っておこうか。」

「確かに、福建の劉家と言えば、その昔は、そんな神話も歴史も欲しいままだったとは思わね。まだそれに未練があるというの？文化大革命で廃絶された鬼神の技を、そうまでして護りたいの？」

さもがっかりしたように、劉黄綺は鼻で笑い、肩を竦めた。

「何を言う。そんな小さな話ではないぞ。私が願う神話とは、これからあの大陸を西の果てまで覆わんとする神話だ。新しい歴史だ。家系を高めてみせるための古ぼけた神話でも、かすれで失せかかった虚しい歴史でもない。」

「一つ尋ねます。あなたの娘、劉蓉はどうしています。」

水原環が問うた。

「分かっているんじゃないのか？娘は、そこにいる。私がこの世で最も愛する、私の切り札だ。」  
ゴヴァ、という音とともに瓦礫の山が飛び散り、純白の衣装に身を包んだ少女が大地の中から立ち現れる。

その姿は、その周りに控えるカラーズの七人目、のようにも見えた。だが、さすがに邪神、禍々しさは尋常ではなかった。自らが巻き上げた瓦礫が落下してきても、その身体には触れることなく弾かれていくのが見える。邪神の背後の景色も揺らいで見える。足先が、僅かに宙に浮いているように見える。

一つ特徴的だったのは、眼球上に走る細かな文字のような影だ。邪神の認知する世界を上書きし改変するかのように、その影は絶え間なく変化していく。

「なるほどね。邪神の五感を拘束しているのね。」

九条がそう言い放つ。

「ふん、まあ、それだけではないのだが。　そろそろいいか？こちらはあいにく、忙しい身の上でね。」

（北と南は水原さんへ、西と東は私について。あれを使うわ。）

途端に式神たちの配置が換わる。劉黄綺が笑う。

「今さら手勢を分けるのか？こちらは構わんが、無駄死にの確率が跳ね上がるだけだぞ？」  
「どうかしら？」



九条も水原も、一二柱の式神少女たちも笑った。

日没だ。

常人が触れればそれこそあっさりとの気の狂れそうな濃密な霊気の中、邪神兵器との戦いが始まった。

ようやく地平線から全身を現した、大きすぎる十六夜が、薄の原を照らしている。

満月でない分、月そのものが歪んだように見える。

教誨師は、笑っていた。

笑いながら、剥き出しの腕や裸足の足に傷が増えていくのも構わずに、走り回っていた。

笑顔の教誨師の後ろを、月光に煌めく涙の滴が追いかけた。

薄の穂先の一つ一つに、物言わぬ小さな神が座っていた。座ったまま、ただの穴蔵のような眼で、じつと教誨師を見ていた。

空には赤黒い妖気の流れがあり、大地には青白い地脈の流れがあった。

自らの手の中には、鬼斬りがあった。

その他には、何もなかった。

高ぶりにまかせて鬼斬りを振るった。

刀の魔力に吸い寄せられる粗霊たちを斬った。

舞うように剣を振るい、剣を振るうように舞っていた。

やがて

薄の原のただ中にぼっかり空いたうつろな空間で、月に向かって正座をすると、鬼斬りを自らの首筋に押し当てた。

チヂ、チヂと、薄の穂に座る小さな神たちがざわめく。

つと、紅い血の筋が鬼斬りを、そして白い首筋を這い始める。

楔ぎのため身に着けた白い装束の襟が、染まっていく。

月光の閉ざす世界の中、目覚めた魂にとって、世界は余りにも、眩しかった。

清冽で、無慈悲で、絶対であった。

目覚めを覚えた者故の、ケガレの自覚。

頸の動脈を切れば、すべてが終わる。

いのちを断つまいとする意志と、それを今断たんとする誘惑とがせめぎ合う。

そのまま、しんとした時間が過ぎる。

歪んだ月が、昇ってゆく。

教誨師の内面の、壮絶な葛藤も動揺も、希望も絶望も、まるで関係ないことのように時間が過ぎる。

だが、やがて。

ぴくりと、鬼斬りが、震えた。それはあるいは、みさをの起こした祈りの奇跡だったのかも  
しれない。

それで目覚めを迎えたかのように、教誨師は一つ、深く間遠な息を吐いた。  
「を、を、」

ただ二声、教誨師は声を上げた。

月輪に向かい、大地に向かい、深々と額付いた。

世界は眩しく、無慈悲で、美しかった。

静かで、荒々しく、悲しかった。

だがそこが、その世界こそが、教誨師の世界であった。

叫ぶべき思いを、すべて心の奥底に畳み込んだ。

過去世が、生きてきた道程として立ち返る。

現世が、生きるべき現実として立ち返る。

魂が、あるべき場所に還る。

己が死命を、思い出した。

絶望と畏れは、失せたわけではない。

みさをが開いた背中の「穴」は塞がっていたが、気を許せばいつでも喉を押し広げ、口から

まろびでてしまいそうな己の魂を、全身全霊で押さえ込む。

深く長い呼吸法を以て、暴れる己が魂を抱え込む。

長く、長い息を吐き、ようやく、ひとまずの落ち着きを得る。

すると、背後で荒々しく、草木を踏み分ける音が聞こえた。

教誨師は、ゆっくりと身を起こすと、刃を鞘に戻し、そつと振り返った。

その口から出てきた言葉は、意外な名前であった。

「かさね？」

自分の言葉でありながら、それは、教誨師自身にとっても意外な言葉だったらしい。ふつと、笑みを浮かべる。

「ごめん、ケイさん、だったね。」

「お前、ひなの、なのか？」

山野を駆けてきたが故の荒い呼吸を整えつつ、森田ケイは聞き返した。

「あ、名前、思い出してくれたんだ。うれしい……。」

そう言つて、教誨師であるはずの少女は輝かしい笑顔を一瞬だけ見せると、立ち上がり、だかくるりと背を向けた。

もう一度、振り返ったとき、そこにいたのは、相馬ひなであった。

「だけどね。今のあたしは、相馬ひなだから。ひなのには、いろいろ教えてもらったけれど、

この時代のこと、そして、今回の件については、自分でやらなきゃって、言ってくれた。」

「お前、大丈夫なのか？」

首の止血のためのハンカチを手渡しながら、森田が尋ねる。

「そういうことは、聞かないでね。大丈夫でなくても、大丈夫にしなくちゃなんだから。

ただ、そうね。おばさまと、ケイクンのおかげで、あたし、」

風が、横なぎに薄の原を撫でていく。

「ふふ。あたし、鬨えそうよ？」

「そうか。まず、みさを様のご様子を確認して、すぐに向かうぞ。」

「ええ。向こうも、目覚めたみたい。ただ、その前に寄るところがある。」

肉の眼しか持たぬ森田には確認できなかったが、遙か彼方を見据える相馬ひなの視線の先には、正確に東京があった。

その日の夕方、吉田紗幸はようやく意識を取り戻していた。

そして、目覚めたばかりにも関わらず、やがて遠からず自らを訪れる者があるのを、識っていた。

付いてくれていた相馬家のメイドである桜井に頼んで、自らの武装の所在を確認し、偽装し

て病室に届けさせた。

小太刀を、この刀を、鬼斬りに渡さねばならない。

それだけを、桜井に伝えたと、また、ふっと眠るように意識を失った。

夜、九時過ぎ。

その吉田紗幸の病室に、小柄な少女の姿があった。

桜井から小太刀を受け取ると、眠り続ける紗幸の唇に、いたづらに濃厚に口づけた。

「紗幸ちゃん、小太刀、預かるわね。用意してくれて、ありがとう。あなたの分も、殺してくる。」

紗幸の耳元にそう、囁いた。

「お嬢様、いつてらっしゃいませ。」

桜井が、作法の中でも最も格式が高いとされる正式の礼をもって、教誨師を送り出す。

「桜井、吉田を頼みます。」

「かしこまりました。」

教誨師の去った病室で、桜井は、吉田紗幸の涙を見た。桜井とて、涙せぬ訳もなかった。

病院の通用口に向かう暗い廊下に、相馬嶺一郎が立っていた。静かに、教誨師に語りかける。

「はるみ君に、会っていけ。」

教誨師は、ただ頷き、父の後ろを歩いた。

「お嬢様、森田に今、聞きました。」

病室のベッドの上でそう言っつて、それ以上は何も言えず涙をこぼした青木はるみの手の甲に、  
教誨師はそつと自分の手を重ねた。

「大丈夫。心配しないで。 今代の鬼斬りは、相馬ひなだから。」  
それから、相馬嶺一郎に向かって言っつた。

「お父様、帰つてきたら、一緒に秩父に、おばさまのところに行つてくださる？」

「ああ。そうしよう。そう言えば、もう何年も、一緒には行つてなかつたな。」

「ありがとう。それじゃお父様、行つて参ります。」

「おまえの帰還を、待っている。」

「ええ。 ふふ。今だけは、教誨師なんて皮肉っぽい名前、返上しなくちゃ。」

そう言つて、教誨師は笑つた。

「殺してくる。」

そうして教誨師は、森田を従え、病室を静かに歩み去つた。